

清泉女子大学人文科学研究所紀要 第39号 2018年3月

# *Beauty and the Beast* に関する一考察

## ——2つの Disney 版の分析——

笹 田 裕 子

**要旨** 本稿では、Disney 版 *Beauty and the Beast* について論じる。*Beauty and the Beast* は、概してフランスの民話の1つだと思われがちだが、プロットには、古代ローマの寓話との類似が見られる。また、藤原真実は、ヴィルヌーヴ夫人（1695–1755年）が書いた先行作品について、よく知られるボーモン夫人（1711–1780年）による創作フェアリーテイルは、このヴィルヌーヴ版を縮小したものと指摘している。ボーモン版以外にも、本作品には、映画化作品（その多くは基本的にボーモン版に基づいている）も含め、多様な版が存在する。

最初に、*Beauty and the Beast* の多様な版について簡略に紹介し、次に、本作品の2つの Disney 版、すなわち、Gary Trousdale と Kirk Wise 監督のアニメーション映画（1991年）と Bill Condon 監督の実写映画（2017年）を論じる。分析する要素は、ヒロイン Belle（Beauty）の人物造型、Beast の人物造型、両者が関係性の変化を通して遂げる相互成長の3点である。分析の過程で、アニメーション版と実写版を比較しつつ、映像技術にも言及しながら、最終的に Disney 版の特徴を明らかにしていく。

**キーワード**：映画化作品、人物造型、相互成長

## The Study of *Beauty and the Beast*: An Analysis of Two Disney Versions

SASADA Hiroko

**Abstract** In this article, I shall discuss the Disney versions of *Beauty and the Beast*. Although this story is generally regarded as a French folk tale, the plot is similar to that of an ancient Roman allegory. According to Mami Fujiwara, there is the preceding work which was written by Madame de Villeneuve (1695–1755) and the well-known literary fairy tale, which was written by Madame de Beaumont (1711–1780), is the short version of the Villeneuve version. In addition to the Beaumont version, there are several versions of *Beauty and the Beast*, including film-adaptations, and most of them seem to be basically based on the Beaumont version.

First, several versions of *Beauty and the Beast* are briefly introduced, then two Disney film-adaptations of this story, an animated film which was directed by Gary

Trousdale and Kirk Wise (1991) and a live-action film which was directed by Bill Condon (2017), are examined. The whole analysis is divided into three sections: first, the portrayal of the heroine called Belle (Beauty); second, the characterisation of the Beast; third, the mutual growth of both protagonists through the changing relationship between them. In the analysis, two versions are compared and contrasted, and the cinematic techniques are also touched on. As a consequence, the distinguishing features of the Disney versions of *Beauty and the Beast* are elucidated.

**Key words:** film-adaptations, characterisation, mutual growth

*Beauty and the Beast*は、概してフランスの民話の1つだと思われがちだが、プロットやモチーフは、他国の古代の寓話に端を発すると考えられている。藤原真実は、よく知られるボーモン夫人による創作フェアリーテイルが、先行作品であるヴィルヌーヴ夫人の版を縮小したものだということを指摘している。ボーモン版以外にも、本作品には、主にボーモン版に基づく映像化作品も含め、多様な版が存在する<sup>1)</sup>ことから、本稿では、まず、*Beauty and the Beast*の多様な版について簡略に紹介する。次に、本作品の2つのDisney版(アニメーション映画と実写映画)<sup>2)</sup>に焦点を当て、その特徴を明らかにするために、ヒロインであるBelle (Beauty)とBeastそれぞれの登場人物の描かれ方を分析する。さらに2人の主人公の関係性の変化を通しての相互成長について論じる。考察は、適宜映像技術にも言及し、2つの作品を比較対照しながら進める。尚、アニメーション版から26年後に公開された実写版が、アニメーション版を元に制作された作品<sup>3)</sup>であることから、より発展した作品であるという前提で、実写版により重点を置いた論考となろう。

## 1. 多様な*Beauty and the Beast*

本項では、*Beauty and the Beast*の多様な版の中から、主要な作品について簡略に紹介する。まず、上述のとおり、フランスの民話を元に書かれたボーモン夫人(Madame Jeanne-Marie Leprince de Beaumont, 1711-1780)の著作のみ作者名が言及されてきたこの物語には、創作フェアリーテイルとしては先行作品であるヴィルヌーヴ夫人(Madame Gabrielle-Suzanne de Villeneuve, 1685-1755)の著作*La Belle et la Bête* (1740)が存在する。<sup>4)</sup>

妖精の呪いによって野獣に姿を変えられた王子を誠実な美女の愛が救うボーモン版は、最も知名度が高い作品であるといえよう。後述するJean Cocteauや

Disneyをはじめとする映画化作品などの翻案ものは、主にこの版が元になっている。<sup>5)</sup> 短編であるボーモン版に対して、ヴィルヌーヴ版は二部構成の長編であり、美女が愛を告白することで野獣の呪いが解けた後も、そこで物語が終わらず、野獣と妖精が、美女が知り得なかった背景事実を、それぞれの物語として順に語る。その他、文学作品の中で知られているものとしては、ヴィルヌーヴ版を要約してまとめた物語となっている、スコットランドの文学者 Andrew Lang (1844-1912) による *The Blue Fairy Book* (1889) 所収の 'Beauty and the Beast' や、内容的にはボーモン版とほぼ同じだが、美女が父親に求める土産のみ、一輪のバラではなくタイトル通り「空高く飛び歌う一羽のヒバリ」に変えられている、グリム兄弟 (Jacob Ludwig Carl Grimm, 1785-1863 および Wilhelm Carl Grimm, 1786-1859) による 'The Singing, Soaring Lark'<sup>6)</sup> などが挙げられよう。<sup>7)</sup>

映画化作品では、Jean Cocteau 監督の *La Belle et La Bête* (1946) が、この物語の最初期の映像化作品として最もよく知られている。Cocteau 版は、2014 年公開された後続作品である Christopher Gans 監督の *La Belle et La Bête* と同様、ボーモン版に基づいている。原作と同様フランスで生まれたこの白黒映画は、フェアリーテイルを元にしてはいるものの、子どもから大人までが楽しめるファミリー映画として制作された Disney 版とは異なり、大人の視聴者を対象にしたシュールレアリスティックな作品である。<sup>8)</sup> 全体的なプロットはほぼ原作どおりだが、Belle の兄の友人が主要な役割を果たす。最後に野獣が王子に戻る際、容姿は美しいが欲の深いこの友人が野獣の城の財宝に手を出そうとして石像のアルテミスに矢で射られるが、その姿は瞬間に野獣に変わる。しかも、王子に戻った野獣は、不思議なことに、この兄の友人と生き写しである。<sup>9)</sup>

また、これから扱う Disney 版は、Gary Trousdale と Kirk Wise 監督のアニメーション映画 (1991 年) と Bill Condon 監督の実写映画 (2017 年) だが、アニメーション版はボーモン夫人を元にした翻案ものであり、実写版は先述のとおりアニメーション版を元に作られた作品である。<sup>10)</sup>

## 2. Belle<sup>11)</sup> の人物造型

Disney 版には、ヴィルヌーヴ版やボーモン版の冒頭で語られる Belle の家族に関する描写はない。いずれの版でも、美女は複数の兄や姉がいる末っ子という設定だが、Disney 版ではもともと Belle を一人っ子という設定にしているため、兄と姉に関する描写は必要がない。また、父親の設定も異なり、文学作品ではかつて裕福だったにもかかわらず事業の失敗により貧乏になった商人<sup>12)</sup>

だが、Disney版では、Belleの父親はアニメ版では発明家、実写版ではオルゴール職人である。妻を亡くしたという設定は、一人娘のBelleと父親が互いにこの世でただ一人の家族を最も大切にしているという状況に、より説得力を持たせる機能を果たしている。女性的な資質が姉より優るからではなく、状況から自然に母親に代わって父親の傍で暮らしてきたDisney版のBelleは、家のことを全てとり仕切る女主人であり、この点は従来のDisneyのヒロイン達と異なる。<sup>13)</sup>

さらに、いずれの版でも、Belleの知性を裏づける描写が、冒頭で提示される。周囲から‘peculiar’とか‘funny’とか‘odd’などと形容され「変わった娘」とみなされているBelleは、男女を問わず誰もがふり返ったり一瞬目を留めたりせずにはいられない美しさを持ちながら、そのことに無頓着である。

この場面の人物造型は、アニメ版でも実写版でも、動きと言葉という異なる2つの手段の組み合わせによって表現されている。<sup>14)</sup> ミュージカルであることから、登場人物の歌の内容に加え、本を片手に小さな町の人に朝の挨拶をしながら歩くBelleに対して、挨拶を返しながらもお互いに囁き合う人々の様子や視線から、上述のように、この美しいヒロインがやや異端視されていることが分かる。さらに、我関せずという様子で夢見る足取りで歩くBelleが口ずさむ‘there must be more than this provincial life’という歌詞からは、ここにはない世界に思いを馳せる空想力豊かな人物であることが分かる。

さらに、次の貸本屋の場面では、店主とBelleのやりとりから、Belleがこの村でただ1人の読書家であり、本を読むという行為が、この「変わった娘」の知性に寄与していることが明示されている。貸本屋の店主は、アニメ版でも実写版でもBelleに好意的である。新刊が届くのに時間がかかる田舎町で、実写版では、何度読んでも読むたびに感動を与えてくれるという1冊を手に出るBelleを、店主は感心したように笑顔で見送るが、アニメ版の店主は、熱心な文学少女であるBelleにお気に入りの1冊を気前よくプレゼントしてくれる。また、アニメ版では発明家の父親は、快く実験に手を貸してくれる娘を信頼しているし、実写版の父親もBelleを自分の緻密な作業の助手として信頼している。これらの描写から、Belleは、知性を好もしく思いそれを伸ばすことを奨励するような男性登場人物が、常日頃身近にいるヒロインであるということが、明示されている。

Belleは、原作とは異なり、遠出をした父親が帰らず乗っていた馬だけが戻って来たのを目にすると、誰に強要される訳でもなく、躊躇なくその馬に乗って父親がいる場所を目指す。そこに待ち受けていたのが、野獣とその城に幽閉される父親であると知った後も、父親を救うため、自分が代わりに残る決意をす

る。原作でも、美女は悪意をもつ姉達に詰め寄られると即断で自己犠牲を決意するが、Disney版ではさらに時間の猶予も与えられていないことから、その判断の素早さが強調されている。優しさや愛情深さという従来の女らしさだけでなく、即時に自ら決断を下す力や、外見に惑わされず相手の本質を見抜く洞察力などの知性を兼ね備えたBelleは、新しいヒロイン像を提示しているといえよう。<sup>15)</sup>

意志を持ち自ら行動するヒロインだが、BeastとGastonが闘う場面においてのみ、Belleは、ただ遠くから見ているしかない状況に置かれるため、受け身の従来のDisneyの「お姫様」<sup>16)</sup>と大差ないように見える。しかしながら、本作品では、1人の王子を射止めるために複数の女性が競うのではなく、複数の異性に争われているのはヒロインの方であり、この点が従来とは異なっていると言えよう。アニメ版では、最初にBeastがBellに気づいた時は庭にいるBelleを見下ろす形になるが、実写版でBelleが争う2人を前に立っている位置は、かなり高い塔の窓なので、丁度両者を見下ろす位置にいることになる。すなわち、Belleが2人の男性より優位にあることが示される。

新しいヒロイン像を目指して生み出されたDisney版のBelleの長所は、「男らしい」男性登場人物<sup>17)</sup>との対比で、さらに強調される。

### 3. Beastの人物造型

Belleに求婚する同じ村の住人Gastonは、ヴィルヌーヴ版にもボーモン版にも登場しない、Disney版で加えられた人物である。実写版はアニメ版を元に作られているので、Gastonもあまり変わらない人物として描かれている。異なる点は、アニメ版では狩猟が得意なマッチョという設定だが、実写版では単に小さな田舎町の中だけでちやほやされている訳ではなく、‘... ever since the war, I’ve felt like I’ve been missing something.’という台詞から、戦争で功績があるらしいことが分かり、さらに平和な時には退屈を感じるような人物だと推測される。

容姿や体格に恵まれているにもかかわらず、知性のかけらもなく、腕力と自惚れだけが強い愚か者Gastonは、外見を除けば様々な長所をもつ野獣の引き立て役として機能している。Jerry Griswoldが指摘するように、Belleの知性の象徴である本を取り上げ、いかにも退屈な代物だといわんばかりの表情で放り投げ、泥水の中に落とした後踏みつけるアニメ版のGastonの行為には、女性の知性を否定する典型的な男性像が反映されている。<sup>18)</sup>

実写版のGastonも知性がないことでは大差なく、Belleを見かけると走り寄

り、手にしている本を見て‘Oh, you are reading.’と話しかけ、‘Do you read?’と言うBelleに対して、少し困惑した様な表情で‘Well, ... a book is something to read.’と答えている。この場面では、本とは無縁の人物像が描写されている。

愚かなだけではなく邪悪さも併せ持つGastonが、じつは野獣よりも恐ろしい「怪物」であることを強調する上で、Disneyの実写版においてLe Fouが果たす役割は大きい。アニメ版では、ただのGastonの太鼓持ちでしかないが、実写版では、Gastonに一目置き何かと細やかに機嫌をとるような言動をする一方で、その邪悪さが目立ち始めると、Gastonのことを‘Another monster is here.’と独白する場面もある。さらに、Belleの父親を縛って森に置き去りにするGastonを（弱弱しくではあるが）止めようとしたり、Gastonが町の人々と共にBeast退治に出かける際、邪魔をさせないように父親ばかりかBelleまで閉じ込めると、その行き過ぎた行動を諫めようとしたりすることから、Le Fouという人物が実は善良だということが分かる。しかも、これほど尽くしてきたLe Fouが危機に陥ると、Gastonはあっさりと切り捨てる。このように、常に側につき従うLe Fouという登場人物は、Gastonの内的欠陥を強調する役割を果たしているのである。

Beastは、最初の登場では恐ろしさしか感じさせない。アニメ版でも実写版でも原作と同じくBelleの父親が一輪のバラを手折ったとたんに姿を現わす。その外見のみならず、「ローアングル (low angle)」と「ハイアングル (high angle)」というカメラアングルを用いた描写法により、実写版ではより顕著にBeastの恐ろしさが伝えられている。驚きのあまり腰を抜かして地面からBeastを見上げるBelleの父親が「ローアングル」で映し出される一方、その正面に影を落として立ちはだかる大柄なBeastは上から見下ろす「ハイアングル」で映し出される。正反対の効果をもつショットの使用により、両者の力関係のみならず、Beastがどれほど恐ろしいかが表現されている。<sup>19)</sup>

文学作品では、野獣は、呪いによって、容姿のみならず知性も奪われている状態にある。粗野な言動しか出来ないのは、そのせいである。<sup>20)</sup> Disney版ではあまりこの点に言及されないが、野獣がじつは高い知性の持ち主であることは、城の中の膨大な蔵書をもつ広大な図書室からも伺われる。アニメ版では、Belleを喜ばせたくてBeastが図書室へと案内する場面は、2人が心を通い合わせる契機となっているが、この場面は実写版にも踏襲されている。しかも、実写版では、あまりの蔵書数に驚いたBelleの問いかけから始まる以下のような両者のやり取りに、機知に富むBeastの一面が窺える。

Belle: Have you really read every one of these books?



Beast: What?... Well, not all of them. Some of them are in Greek.

Belle: Was that a joke?... Are you making jokes now?

Beast: Maybe.<sup>21)</sup>

この後、Belleは思わず笑い出してしまう。

また、Belleの愛読書は、アニメ版では、本の内容を説明する歌詞からは騎士物語らしいと分かり、実写版ではWilliam Shakespeare (1564-1616) の *Romeo and Juliet* (1594) だと明言されている。つまり、Belleが読んでいる本は主に文学作品だと推察される。これに対して、実写版のBeastは、蔵書数からも‘There might be more to read.’という台詞からも、幅広い分野の読書をこなしてきたことが分かる。さらに、この台詞の直後にBelleを図書室へ誘っていることから、Beastは己の知性の源をBelleと分かち合おうとしている。この点からも、Beastが提示するのは、先述のGastonと対照的な、女性を同等とみなす男性像であるといえよう。

容姿や体格など生来は似た資質を与えられながら、その後経た人生の結果を反映してか、内面的には正反対の人物であるBeastとGastonは、お互いに「二重身」<sup>ダブル</sup>であると考えられよう。ユング心理学の「影」<sup>シャドウ</sup>と<sup>22)</sup> 同様、Beastが持ち得た負の部分と備えた人物がGastonなのである。両者の差異は、最後の対決の場面で明らかになる。実写版でもアニメ版でも、Beastが優位となり相手を殺すことさえ可能な形勢になるや、Gastonはそれまでの猛々しさをかなぐり捨て、必死で命乞いを始める。Beastは、殺されそうになっていたにもかかわらず、Gastonを許す。このBeastの行動が示すのは、従来の王子には見られなかったものであり、むしろ女性が示す美德であった寛容さだといえよう。アニメ版では花を愛し小鳥と戯れ、実写版では馬を懐かせることを通して描かれる、Beastの優しさにも通ずるところがある。

一方、自尊心を棄てた謝意の表明で許されたGastonは、Beastが戻って来てくれたBelleの方へ気をそらし近寄ろうとすると、まるで戦略が成功したかのようにBeastを背面から攻撃する。アニメ版では刺し殺そうとし、実写版では拾い上げた銃で撃つ。いずれも即死はしなかったものの、Beastに致命傷を与える。この悪漢は、いずれの版でも最後には報いを受け、この攻撃の直後自ら足を踏み外し落下して死ぬ。Beastが最終的に得るものは、「二重身」であるGastonの死によって勝ち取れたと言っても過言ではなからう。息も絶え絶えの状態でもBelleの元へ辿り着いたBeastは、一旦息をひきとる間際、最愛の者からの愛を告白されるのである。

#### 4. 関係性の変化と相互成長

ヴィルヌーヴ版もボーモン版も明らかに恋愛譚であり、それは多くの翻案作品にも踏襲されているといえよう。Disney作品では、BelleとBeastが互いに理解し合い恋をする過程で、それぞれが成長を遂げることに焦点が当てられていると考えられる。

文学作品では、野獣の正体が最後まで読者に伏せておくべき秘密であることから、美女の視点から語るしかない。すなわち、美女が知り得る事実しか、読者にも開示されない。<sup>23)</sup>これに反して、映画では、異なる視点から視聴者に向けて、美女をとり巻く事実や野獣に関する事実も描くことが可能である。Disney版では、アニメ版でも実写版でも、例えば、BelleがBeastの城に行ってから町で起こる出来事なども視聴者は知ることができる。さらに、アニメ版・実写版共に、醜い老婆に親切に出来なかった傲慢な王子が、外見からは計り知れないものを知るために野獣にされた過去の経緯が冒頭で詳しく描かれる。<sup>24)</sup>

登場人物造型の中で述べたように、Disney版では、読書を楽しむことが、BelleとBeastが共通項として両者の距離を縮める役割を果たしている。城から逃げ出したBelleをオオカミから救ったためにBeastが負傷し、Belleが手当てしたり看病したりすることが、最初の両者の接触となることは、アニメ版でも実写版でも同じである。だが、アニメ版にはない場面が実写版には追加されており、両者が同じ知識を共有できることが明確にされる。床に伏すBeastの傍らで、Belleが‘Love can transpose to form and dignity. Love looks not with the eyes but with the mind and therefore…’とShakespeareを暗唱すると、Beastが途中から‘And therefore is winged Cupid painted blind.’と続きを暗唱する。Belleは、この恐ろしげな外見のBeastがShakespeareを知っていることに少なからず驚かされる。両者が共通の知識と興味を持っていることを知る瞬間である。しかも、この時、横たわっているBeastとBelleの視線はほぼ同じ高さにある。

やがて、Beastが庭で読書をしているところにBelleが偶然通りかかり、近づいて書名が*Guinevia and Lancelot*であると知り、驚きながらも喜ぶ様子が描かれる。最初にBelleの愛読書を聞いた時には「ただの恋愛もの」として鼻であしらったBeastが、自分の方からBelleが愛好する物語を共有しようとしていることが分かるが、これは実写版にしかない場面である。

挿入される順序は異なるものの、人間用の小さ過ぎるスプーンを持つことができないBeastのために、Belleが自分もスプーンを置く食事の場面は、アニメ版でも実写版でも、Belleが自らBeastとの距離を縮めようとする場面となって



いる。実写版では、Belleに誘われて躊躇しつつも馬に触れて手なづけたり（アニメ版では小鳥に餌をやり戯れる場面に当たる）、共に雪遊びを楽しんだりした後なので、Beastの方も席を立ちBelleの隣に腰を下ろし距離を縮めている。

カメラのショットの中で「ミディアムショット（medium shot）」は、Louis Giannettiによると「人物の膝か腰から上を映す（containing a figure from the knees or waist up）」ショットであり、移動や会話の最中に人物を映す際に役立つ。その中でも「ツーショット」は2人の人物の親密性が増したことを一目瞭然に明示する。さらに、Giannettiは、この「ミディアム・ツーショット（medium two-shot）」には、2人の人物が「対等（equality）」であることを強調する機能もあると説明を加えている。<sup>25)</sup>

実写版では、BelleとBeastの距離が次第に縮まり2人で過ごす時間が増えてきた時点で上記の「ミディアム・ツーショット」が用いられている。2人で城の庭園を散歩している時、思わず立ち止まって2人並んで橋の上から凍った川を眺める場面である。それまでBelleは本を片手にBeastに読んで聞かせていたのだが、2人はその位置関係のままBeastの催促に応じてBelleが朗読を続ける。

この場面に続いて、映画ならではの手法を活かし、両者が、それぞれ1人になった時、お互いへの気持の変化に気づく様が描かれる。視聴者は、主人公達がお互いにはまだ知り得ぬ情報を、‘There may be something there that wasn’t there before.’という内的独白<sup>26)</sup>を映す歌を媒体として共有することができる。両者の間には「これまでにはなかった何か」が生まれつつあることが分かる。

Disney版では、アニメ版でも実写版でも、BelleとBeastが共に踊る場面が、2人の距離が最も縮まるクライマックスとなっているが、じつは、このお膳立てをはじめ、様々に主人公を励ます登場人物が配置されている。ヴィルヌーヴ版でもボーモン版でも、妖精が美女に外見に惑わされぬよう励ますが、Disney版では、妖精の代わりに、王子と共に呪いをかけられ、今では燭台や置時計などの物と化したBeastの使用人達が2人を励ます。2人への細やかな助力は、自分達も元の姿に戻りたいせいもあるが、Beastが王子だった頃、決して使用人達から愛されていない主人ではなかったことを推察させる。この擬人化された物として登場する使用人達は、アニメ版・実写版共に頼もしい脇役として活躍し、Gaston率いる町の人々が攻めて来た時も、見事に撃退している。実写版では、アニメ版と異なり、Beastが息をひきとり、ガラスケースの中のバラの最後の花弁が落ちた時、<sup>27)</sup> これまで動いていた物が次第に止まって〈命〉を失っていく場面が描かれている。既にこれらの脇役に慣れ親しんでいた視聴者に対して、実写版では、呪いが解けないという結果がもたらす事実をより明確

に示している。

2つのDisney版では一旦息をひきとったBeastを甦らせるのは、後悔し初めて正直に恋心を打ち明けたBelleの涙である。原作を踏襲し、気丈で知的なヒロインの女性的な資質が、この物語では呪いを解く力となっている。また、相互に助け合うというBelleとBeautyの関係性には、従来の男性性とは逆の性質が見られる。<sup>28)</sup> Disney版*Beauty and the Beast*には、時間をかけた両者の関係の変化は、BelleとBeastが己の中のそれまで弱点と思われた性質も隠すことなく、互いに歩み寄ることで補い合い、両者にとっての成長をもたらしした様子が明示されていると考えられる。じつは、この物語の構造は、姫が王子に救われる既成の物語とは根本的に異なる。呪いに〈囚われた〉王子をBeastの姿から〈解放〉して〈救う〉役割は、ヒロインであるBelleが果たす。しかも、最終的に必要な決断を下すのもヒロインであり、運命を決める大切な鍵を握っているヒロインは、力関係で明らかに優位にある。ジェンダーの観点から考えると、従来の伝統的な役割が逆転されているといえよう。

以上のように、2つのDisney版*Beauty and the Beast*について考察してきたが、26年を経た版で、人物造型の点でより新しさが加えられたのは、BelleよりもBeastであると考えられる。アニメ版で描かれる童心を失わない様子はそのまま残しながら、その知性の高さがより詳しく描かれている。前述のように、アニメ版でも実写版でも善良で柔和さという面を隠さないBeastが、知性や決断力という資質をもつBelleと、性別による差異を越えて共に並んで生きることができる人物であることは、実写版ではより強調されているといえよう。

Disney映画を論じる上でジェンダーに関する考察は不可欠だが、本稿の中で十分に検証されているとは言い切れず、試論に過ぎない映像分析も含め、Disney版*Beauty and the Beast*をより明確に論じるには、さらなる探究が必要である。

## 注

- 1) Jack Zipes編 *The Oxford Companion to Fairy Tales* 第2版 (Oxford: Oxford UP, 2015) でも指摘されているように、美しい女性が正反対の外見の男性を愛するというヨーロッパの民話は多数存在するが、そのプロットには、古代ローマの諷刺作家アプレイウスの『黄金のロバ』(原題『変形譚』)所収の「クピドとプシュケ」との類似が見られ、古代インドの動物寓話『パンチャタントラ』所収の「ヘビと結婚した少女」のモチーフにも通ずるものがあると考えられている。(p.52) 尚、藤原真実の論文「恋愛地図」で読む『美女と野獣』——連作的読解の試み(『人文学報』第466号、2012年)の注には、Betsy Hearne著 *Beauty and the Beast. Versions and Revisions of*

- an Old Tale* (1989) と Marina Warner 著 *From the Beast to the Blonde: On Fairy Tales and Their Tellers*. (1995) の2冊が、ボーモン夫人以降の本作品の多様な版について詳述している書として紹介されている。(p. 3)
- 2) 本論考においては、Disney版の実写版とアニメ版は、それぞれ以下のDVDを使用した。
- アニメ版：Dir. Gary Trousdale & Kirk Wise. *Beauty and the Beast*. Walt Disney Studio Japan, 1991.
- 実写版：Dir. Bill Condon. *Beauty and the Beast*. Walt Disney Studio Japan, 2017.
- 3) 実写版のエンドロールに明記されている。
- 4) ヴィルヌーヴ夫人の著作の方が先に出版されたという事実は、他の研究書 (Zipes, Warner など) でも言及はされているが、ボーモン夫人の著作がオリジナルとみなされたり、さらにその元となったフランスの民話が存在するとされたりした従来の誤解については、ガブリエル＝シュザンヌ・ド・ヴィルヌーヴ夫人著・藤原真実訳『美女と野獣 [オリジナル版]』(白水社、2016年) の「訳者あとがき」の説明 (pp. 63-4) に加え、前掲論文「恋愛地図」で読む『美女と野獣』にも詳述されている。(pp. 1-4)
- 5) 藤原、Griswold、Duugan など複数の指摘がある。
- 6) このタイトルは、英訳版グリム童話集 *The Brothers Grimm: The Complete Fairy Tales* (Hertfordshire: Wordsworth Editions, 1998) 所収のものである。(pp. 399-404)
- 7) さらに、Angela Carter (1940-1992) の短編 'The Tiger's Bride' (1979年初版の短編集 *The Bloody Chamber* 所収) も、フェミニストの視点から翻案された作品として知られている。本作品では、最後の変容により読者を驚かせるのはヒロインの方である。また、Charles Perrault の「さか毛のリケ ('Riquet à la Houppe') (1697) のように、不器量な男性が実際に美しく変わったのか、恋をした女性にとってだけ美しく見えるのか、曖昧なままにされている物語もある。
- 8) Katherine A. Fowkes は *The Fantasy Film* (Oxford: Willey-Blackwell, 2010) において、Cocteau 版が Disney 版とは対照的に、アヴァンギャルド的な観点から作られた映画であることを指摘している。(p. 25)
- 9) Disney 版の Gaston の前身だとも考えられるような登場人物である。尚、この作品では、野獣<sup>ベット</sup>の城の中の物は〈生きて〉いて動くことができる物が多い。この石像も一例であり、燭台を掲げる手は人間の腕の形をしていて、前後左右に動く。また、暖炉に刻まれた人間の顔をした石像も、煙で瞬きをする。時代的に、このような箇所<sup>ベット</sup>で用いられているのは本物の人間である。Beast の城の家具を含めた日用品が〈命〉をもち活躍する Disney 版では、この点も踏襲されていると考えられよう。
- 10) Anne E. Duugan は、Jack Zipes, Pauline Greenhill, Kendra Magnus-Johnston 編著 *Fairy-tale Films Beyond Disney: International Perspectives* (New York: Routledge, 2016) 所収の論文 'The Fairy-tale Film in France: Postwar Reimaginings' において、Disney のアニメーション版への Jean Cocteau の影響を指摘している。(p. 64) 具体例は挙げられていないが、本稿で指摘する類似点は、上述の通りである。
- 11) フランス語の「オリジナル」の原題 *La Belle et La Bête* に沿うなら、表記は「美女<sup>ベル</sup>」

と「野獣<sup>ベット</sup>」とすべきだが、本論では第2項以降、分析対象のDisney作品の中の呼称に沿い、BelleとBeastと表記する。

- 12) 尚、ヴィルヌーヴ版では、商人の父親は美女<sup>ベル</sup>の実の親ではない。王子に戻った野獣<sup>ベット</sup>と結婚する美女<sup>ベル</sup>が、じつは妖精の血を引く王族の出であり、もともと両者は釣り合う身分の生まれであったことが最後には明かされるという設定である。この美女<sup>ベル</sup>の出自に関する説明に、二部構成のうち第二部の大半が費やされている。
- 13) 若桑みどり著『お姫様とジェンダー——アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』（ちくま新書、2004年）では、「白雪姫」の分析において、家父長制社会における理想の家庭の守り手となる「家庭的な女性」を表しているのが、まさに「白雪姫」であったことを指摘している。（pp. 106-107）Belleが持つ優れた知性や父親の仕事を助けることができる能力といった資質は、決して「家庭的」ではない。
- 14) Louis Giannetti 著 *Understanding Movies* (New Jersey: Pearson Education, 2005), pp. 6-7.
- 15) Bob Thomas 著 *Disney's Art of Animation: From Mickey Mouse to Beauty and the Beast* (New York: A Welcome Book, 1991) にあるように、Disneyのアニメ版 *Beauty and the Beast* の脚本家 Linda Woolverton が当初試みたのは、フェミニスト的なヒロインを創り出すことであった。（pp.142-3）  
Fowkesは前掲書において、Dreamworksの映画 *Shrek*（2001年）をDisneyのアニメ版 *Beauty and the Beast* から派生した翻案ものの1つとみなす見解を提示している。この作品のヒロインは、姫でありながら王子ではないバケモノ *Shrek* を伴侶として選び、共に暮らすうちに同化していくという、今までにない人物造型がされている。だが、若桑が指摘するように、従来王子に将来選ばれることを受け身で待つ「お姫様」にとって必要不可欠な生来の資質が「美貌」である（前掲書p. 44）ことから、原作に沿い美しいことが前提となっている Belle は、提示の仕方に工夫がなければ新しさのないヒロインとなり得ることは否めない。
- 16) 若桑、pp. 29-32.
- 17) Jerry Griswold, *The Meanings of "Beauty & the Beast": A Handbook* (Ontario: Broadview Press, 2004), pp. 243-245.
- 18) *Ibid*, p. 243.
- 19) Louis Giannetti は、著書 *Understanding Movies* の中で、カメラの設置位置によって生み出される異なる5つのアングルのうち、地面など低い位置に這いつくばる登場人物を映し出す「ローアングル」は、「ハイアングル」との組み合わせにより、暴力的な場面などによく用いられると説明している。（pp. 13-18）
- 20) 野獣<sup>ベット</sup>の愚鈍さがヴィルヌーヴ版とボーモン版に共通するものであることは、藤原真実の論文「怪物と阿呆——「美女と野獣」の生成に関する一考察——」（『人文学報』第391号、2007年）でも指摘されている。（p. 61）
- 21) Condon, *Beauty and the Beast*. これは、'It's all Greek to me. (なんのことやら、さっぱり分からない)' という慣用句をもじった冗句である。
- 22) ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) によると、人間の無意識は「個人的無意識」と「集合的無意識」に分けられる。後者は7つの元型<sup>アーキタイプ</sup>から成るが、「影<sup>シャドウ</sup>」はその1つ

である。

- 23) ヴィルヌーヴ版も、それを元にしたボーモン版も、民話的な語りのために、両作品とも用いているのは「外的視点 (external point of view)」である。ジェラルド・プリンス著・遠藤健一訳『改訂 物語事典』(松柏社、2015年)では、「外的視点」を「すべての登場人物 (考えたり、感じたりできるすべての存在) の外部に視点が置かれ (中略) 感情や思考についてのすべての情報は排除され、登場人物の発話・行為や外見やその背景などを記録することに限定される」視点として説明している。(p. 151) 本作品の場合には、主人公 Belle が上記引用の「登場人物」に当たる。尚、付記するまでもないことだが、同じ文学作品であっても、Carter による翻案ものだけは、花嫁の正体が最後まで伏すべき秘密であることから、事情が異なる。
- 24) Christopher Guns 監督作品 *La Belle et la Bête* (2014) では、一国を治める王が狩猟の愛好が過ぎたことや、それが元で誤って愛妻を射殺してしまったことから、罰として野獣と化す経緯が、野獣の城に滞在する美女が見る一連の夢という形で挿入される。この一連の夢は、本筋にゆるく織り込まれた「挿話 (episode)」である「挿話的プロット (episodic plot)」(プリンス『物語論事典』p. 63) として、ヒロインのみならず視聴者に対しても、徐々に秘密が明かされていく機能を果たしている。
- 25) Giannetti, pp. 12-13.
- 26) プリンスの前掲書によると、「登場人物の思考や印象あるいは知覚の直接的な提示」と定義されている。(p. 96)
- 27) このバラは、傲慢な王子が Beast に姿を変えられる前に、老婆から受け取ろうとしなかったバラで、すべての花卉が落ちる前に呪いが解けなければ、永久に呪いは解けないということを示す、いわば時を刻む砂時計のような役割を果たしている。Disney 版では1枚ずつ花卉が落ちる様子が劇中に挿入される。
- 28) Roberta Seelinger Trites は、著書 *Waking Sleeping Beauty* (Iowa: U of Iowa Press, 1997) において、伝統的な女性の特性は実は強みになり得ることを指摘している。